# 「御所文化、信仰と肖像」
# ～比丘尼（びくに）御所としての法華寺～

## 中世日本研究所・所長のモニカ・ベーテ氏

火曜午餐会・２月第１例会は、法華寺友の会・ＪＡＰＡＮ21と共催、公開講演会として５日13時から当部５階大会議室で開催した。講師に中世日本研究所（京都）・所長のモニカ・ベーテ氏を招き「御所文化、信仰と肖像～比丘尼御所としての法華寺～」をテーマに語って頂いた。モニカ氏は比丘尼御所について「江戸時代、皇女や王女、または公卿の娘などで出家した人が住職となった尼寺のことで、奈良では中宮寺や法華寺が有名」と語った。講演要旨は次の通り。

### 法華寺の再興

12世紀（鎌倉時代）末期、源平の合戦により、奈良の寺院などが焼失し大変な被害を受けた。その後、奈良全体を復興させようとする運動が行われた。その一つが、お寺巡り。法華寺に来られた皆様は、光明皇后の肖像とされるご本尊である十一面観音立像にお祈りをされる。そして光明皇后を近くに感じるような気持ちになりたいと思われる。また、参拝者の中には、法華寺に滞在して守っていただいていた方々もいると文献に残っている。

鎌倉時代に叡尊が寺院を再興し、その後、豊臣秀頼と母の淀君によって再建された。この時再興された本堂・南門・鐘楼は現在、国の重要文化財の指定を受け保護されている。

真言律宗の僧・叡尊には、もう一度「律」を再開しようという気持ちがあり、「律」の考え方にある大変大事な尼僧にも修行をさせた。尼僧は「比丘尼」とも呼ばれ、所定の戒を受けて仏門に入った女子修行者のこと。

その代表的な尼僧が醍醐寺で修行された空如。その後、比丘尼として醍醐寺から、同じような背景がある慈善さんと共に法華寺に来られ、叡尊から教えを受けた。二人は後に法華寺の長老、門主になった。

これがきっかけとなり、法華寺は修行寺になり、仏教的な考え方を次の世代に伝えていく力を持つ大切なお寺となった。

### 比丘尼御所

比丘尼御所というのは、江戸時代、皇女や王女、または公卿の娘などで出家した人が住職となった尼寺のことで、奈良では中宮寺や法華寺が有名。

現在の法華寺の客殿にある襖絵には、綺麗な金箔の天皇家の菊の紋と近衛家の藤が書かれている。これは法華寺が比丘尼御所だという一つの証拠でもある。

桃山時代、秀吉は比丘尼御所に毎年お金を与え、江戸時代まで続いた。法華寺も幕府からお金を貰えるようになった。こういう上位のお寺が比丘尼御所で、現在は尼門跡と言われる。

明治維新後は廃仏毀釈により比丘尼御所という称号は禁止された。

### 室町・江戸時代の法華寺

室町時代の法華寺は、奈良では重要な役割を持っていた。その証拠として、護摩行事の灰を粘土に混ぜて形を作り、文様彩色を施した愛らしい犬形のお守りがある。実際に発掘調査をした際に出土している。この護摩行事は今も続いており、お守り犬も作っているのが一つの証拠となっている。

江戸時代は代々近衛家の息女により継承されていた。門主となった後水尾天皇の皇女は、長生きをされ、そのお陰で法華寺の発展に繋がった。

文献や宝物から、後水尾天皇の皇女に相応しい住む場所が必要だということで客殿を造られたことが分かる。客殿の一番奥の部屋は、お宮さんが座る場所。地域にお宮さんがあることで、安心感や、親しみを得ることが出来る。こういう比丘尼御所には特殊な役割があるのだと思う。

また、お寺は若い人たちを育てる役割もあり、法華寺には教養のための道具がいろいろ残っている。古典文学を覚えるため源氏物語の図や、かるたは自分たちで作る。また、七草絵巻があり、一緒に遊んだり、読んだり勉強したりする。当時のひとつの御所の文化の大事な道具であった。

久我御前が20世紀の初め頃、15歳で入寺。その後門跡となられてから、貴族の人が入ってくる。これは後継者探しを、今までの近衛家からではないところからということだった。周りにいる門跡ではなく、尼さんが儀法や儀礼などをずっと伝え残してきた。ですからその人たちが必要であり、お寺として非常に大切なこと。長くお寺にいて、支え、教えてくれるようなお寺に馴染んでいる人を、次の世代に渡すことが大切なこと。

久我御前は長生きをされたことで、非常に安定していた。儀礼、儀式など法華寺の伝統を守ってくれる後継者がずっと続いているのは非常に嬉しいことです。